

ドイツのドルトムント工科大学のガンブリヌス・フェローシップ・プログラムに採択されました (2025/6/23-2026/4/15)

テーマ：客員研究、国際共同研究、災害の記憶、メモリー学
場所：ドイツ・ドルトムント工科大学

ゲルスタ・ユリア准教授（災害メモリー学分野）は、ガンブリヌス・フェローシップ・プログラムの一環として、ドイツのドルトムント工科大学（Technische Universität Dortmund）に研究・教育滞在のため招聘されました。ドルトムント工科大学では、1994年より毎年、海外の著名な研究者を対象にガンブリヌス・フェローシップを授与しています。本プログラムは、研究および教育における国際協力の強化を目的とするとともに、学生が世界各国の第一線で活躍する研究者と直接交流する機会を提供するものです。

今回のフェローシップに向けた準備は、防災教育の専門家であるロタール・ヴィガー教授との研究交流を含め、日本で開始されました。その成果として、2025年12月4日から15日にかけてドルトムント工科大学での滞在が実現しました。滞在中、ゲルスタ准教授は教育学・教育科学の一環として、ドイツ語による集中講義「メモリー学入門—記憶と忘却」を担当しました。本授業では、メモリー学の主要な理論や概念を紹介するとともに、記憶と忘却の社会的・文化的・政治的側面について考察しました。講義には42名の学生が登録し、ゲルスタ准教授は2026年4月中旬までに12件のモジュール論文の指導を担当しました。

また、研究滞在の一環として、2025年12月10日にはドルトムントの国際交流センター（Internationales Begegnungszentrum: IBZ）において、「『自然？』災害を記憶する—災害記憶の社会的構築をめぐる」と題した公開講演をドイツ語で行いました。講演では、まず「自然災害」という概念そのものに対する批判的検討を行い、そのうえで東日本大震災を取り上げ、被災地に整備された災害伝承施設や震災遺構が集合的記憶の形成に果たす役割について論じました。さらに、長年にわたる実証研究の成果をもとに、災害経験や復興過程におけるジェンダーの視点を提示し、日本の災害伝承施設において女性の声や経験が十分に反映されていない現状について指摘しました。講演には大学教員、学生や一般市民を含む多くの参加者が集まり、活発な質疑応答と議論が行われました。講演後の討論や滞在期間中を通じて繰り返し取り上げられたテーマの一つが、災害ミュージアムと戦争・平和ミュージアムとの比較でした。参加者たちは、記憶の継承、表象、教育、そして困難な歴史を次世代へ伝えることに関する共通の課題について意見を交わしました。

滞在の最後には、共同研究に対する資金支援の可能性や今後の協力体制について協議が行われました。その成果の一つとして、2026年3月16日に災害科学国際研究所において「防災教育」をテーマとした日独ワークショップが開催され、ロタール・ヴィガー教授が招待講演者として参加しました。また翌3月17日には、仙台市の震災遺構仙台市立荒浜小学校およびせんだい3.11メモリアル交流館を共同で視察しました。

最後に、ゲルスタ准教授は、本交流の実現にあたり多大なご支援をいただいたドルトムント工科大学、テッサ・フラッテン教授、ロタール・ヴィガー教授、そしてバルバラ・プラッツァー博士に心より感謝申し上げます。

文責：ゲルスタ・ユリア（災害メモリー学分野）
(次頁へつづく)



2025年12月10日、「『自然?』災害を記憶する—災害記憶の社会的構築をめぐって」と題した公開講演を終えたゲルスタ准教授（右から4番目）とドルトムント工科大学の教員。
撮影：ハイディ・ウィガー